

## 〈翻訳〉

男性の形式と女性の形式について  
Ueber die männliche und weibliche Form

ヴィルヘルム・フォン・フンボルト著  
Wilhelm von HUMBOLDT  
杉田孝夫・菅野健／訳  
杉田孝夫／解題

- 335 男性の形成 (Bildung) と女性の形成に共通に表れる類 (Gattung) としての統一 (Einheit) ということを別にしても、双方の性差 (Geschlechtsverschiedenheiten) は、それ自体互いに完全な調和 (Uebereinstimmung) のなかにあり、そのことによって一つの全体へと融合していくのである。性差による特徴を度外視するにせよ、あるいは同一視するにせよ、いずれの場合でも、人間 (Menschen) の像 (Bild) をその普遍的な性質のうちに獲得するのである。それゆえ双方の形態 (Gestalt) の特徴は、相互に関連し合っている。すなわち一方における力 (Kraft) の表現は、他方における弱さ (Schwäche) の表現によって和らげられ、女性の繊細さ (Zartheit) は男性の強さ (Festigkeit) によって支えられるのである。一方の目は満たされない思いで他方を求め、一方はただ他方によってのみ補われるのである。そしてまさに完全な人間という理想<sup>1</sup>がそうであるように、人間の美の理想もまた、双方に分配されているので、われわれは、結合することによって美が生み出されることになる二つの違った原理のうち、いずれの性においても他方の性が凌駕するのを、見るのである。きわめて明白なことは、男性における美ということを考える場合には、むしろ悟性 (Verstand) が、形式の優位性 (*formositas*) や技術的規範に合致した明確さという特徴によって満足を与えられるのに対して、女性における美ということを考える場合には、むしろ感情 (Gefühl) が、素材 (Stoff) の自由な豊かさや愛らしい優美さという特徴 (*venustas*) によって満足を与えられる、ということなのである。もっとも、双方どちらも、二つの特質を併せもつのでないならば、美という名を要求することはできないのではあるが。しかし、最高の完成された美というものは、ただたんに双方の結合だけではなく、また形式と素材の、技術的規範性と自由の、精神的統一と感覚的統一の、絶妙極まる「バランス」<sup>2</sup>をも必要とするのである。そしてこれが得られるのは、ただ両性に特徴的なものを思考のなかで融合させ、純粋に男性的なものと同様に純粋に女性的なものをもっとも緊密に結びつけたところから、人間というものをイメージするときだけなのである。
- 336

しかし、そのような純粋な男性性 (Männlichkeit) と女性性 (Weiblichkeit) もまたただ見つけだすということだけでも無限に困難なことであり、経験においては絶対に不可能なことである。経験においては、つねにその個人に独自の特徴が現れるのであって、それは、その個人の内部にあるその性に普遍的な特徴を、場合によっては他のさまざまな性質が入り込むことによって歪めていたり、場合によってはたまたまみずからの限界を知らされることによって、最高の完成 (Vollendung) に至るのを妨げていたりしているものなのである。すなわちその異質なもの (Fremdartige) は悟性によってそこから切り離されなければならないし、個人のこうしたさまざまな限界は取り除かなければならず、そうするこ

とによって、純粋な性による特徴<sup>3</sup>というものが現れることになるのである。しかし、悟性はただ不十分な抽象化をすることしかできず、ここでわれわれにとって重要なのは、まさに完全な感覚的イメージ<sup>4</sup>なのである。というのも、性の特徴の真の精神<sup>5</sup>というものは、ただ、ありとあらゆる個々の性質が生き生きと作用し合うところのみ現れうるからなのである。

ところで、この困惑からわれわれは産出的構想力<sup>6</sup>によって救い出されることになるのであるが、この構想力は、経験の領域から理念的な領域へと移行し、すべての偶然による余剰とすべての偶然による限界をその対象から切り離し、理性（Vernunft）という無限なものに、いつもはただ時間のなかで偶然にそして制限されて生まれる現実の個人が示すのとまさに同じ明確な形式を与えるものなのである。ギリシア人は、このすばらしい能力をとりわけ自然によって与えられ、オリンポスの山に理念的な形姿<sup>7</sup>を住ませたのであった。さて、ギリシア人が純粋な独自性と美を求めたとき、ギリシア人は神々の領域に向かい、そこで地上にはなかったものを見出したのであった。ある存在のもっともひそやかな特徴を、まだ開ききっていない蕾みのうちに摘み取り、この繊細さのなかに、ある明確な形姿で包み込むという技法において、この民族を凌駕する者は何世紀にも亘って現れることはなかった。ただギリシアの芸術家のみが、理念そのものを個体化するというに成功したのであり、われわれもまたギリシアの芸術家から、いまここで問題になっている主題について、この上なく満足できる解明を得ることになるのである。

337

女神たちの領域において、われわれは、女性性の理念に、まず最初にデーオーネ<sup>8</sup>の娘において出会うのである。ありとあらゆる甘美な魅力を包み込んでいる小さくて華奢な骨格、豊満な体つき、切なく思い焦がれているかのように潤んだ瞳、憧れに満ちて開かれた口、人を遠ざける厳粛さよりもむしろ乙女のはにかみが滲み出ている優美なしとやかさ、風のそよぎのように全身を覆い尽くしているこの世ならざる優雅さは、か弱さそのものを基盤としながらも、その上に強さを築き上げる性のあり方を告知している。女神の領域に近づくものは、愛と喜びを吸い込むのであり、女神のまなざしそのものが好意的に、そのようにしたいという気持ちを起こさせるのである。ギリシア人のヴェーナーネ<sup>9</sup>を描き出したのは、偉大で遠大な理念である。それは、すべてを生み出し、生きとし生けるありとあらゆるものを貫いて流れている力なのだ。この理念のために、ギリシア人は、ありとあらゆる生み出す存在のうちでもっとも美しい、女性という、咲き誇るばかりの理想の形姿<sup>10</sup>以上に幸福な象徴を選ぶことはできなかったのだ。そして最初の、まだ定かならざる願望で胸がふくらむ瞬間以上に幸福な瞬間を選ぶことはできなかった。

この最初の青春時代においては、女性性はより純粋であるように思われ、他の性質をまだ完全には我がものにしていないというまさにその理由でむしろ孤立しているかのようにさえ感じられる。それは性格というよりも瞬間と傾向性の気分である。きわめて心のこもった表情において<sup>11</sup>、道徳的さらには知的な性格の極めて生き生きとした表現において、たしかに女性的な特質は明らかになるのではあるが、しかしその特質がもっとも素直なかたちで現れるのは、肉体的な形態と感覚的表現においてなのであり、まさにこれが理念にまで高められ、美の女神から輝き出てくるのである。それゆえ、われわれは、われわれの曖昧な感情が女性の形態について期待するものを、美の女神のなかにもっとも容易なかたちで再び見出すことになるのである。そしてわれわれが美の女神を見るときにわれわれの内部に引き起こされる印象を吟味するならば、われわれは自分が溢れんばかりの豊かな魅力に包み込まれてしまっているのを感じることになるのである。その魅力は、すばらしく美しい構成<sup>12</sup>によって保たれ、繊細な優美

さによって慎み深さを与えられるのである。それゆえ、美の女神は、われわれにとってより人間的なものに思われ、けっして神性を否定することがないにもかかわらず、われわれは美の女神に親しげな希望を抱いて近づくのである。

338 愛の女神からははっきりと明白に表出されているものが、*ディアエーネ*<sup>13</sup>の形態においては、まだひそやかに、そして未発達のままに安らっている。ありとあらゆる女性の魅力を備えながら、彼女は、愛という甘美な喜びを撥ねつけ、ただ男性の仕事<sup>14</sup>だけを楽しむのである。同じ考えをもった大勢の女性の遊び仲間たちのまっただなかで、彼女は、森の奥深くまで、無慈悲な弓を手にして獲物を追いかけ、みだらな目をして近づいて来るならず者を、厳しく罰するのである。この乙女の礼節によって、彼女は、*ミネルヴァ*<sup>15</sup>と同類である。しかし、二人の女神の性格は、それにもかかわらず本質的に異なっている。*ユピテル*<sup>16</sup>の恐るべき娘においては、叡智の真剣さが女性のあらゆるか弱さを消し去ってきたのである。それを示しているのは、冷静で、思案に耽る伏し目がちなまなざしである。*ディアエーネ*の目は、生き生きとした欲望を伴ってめざすべき対象にひたと向けられている。彼女はただ好みをつぎからつぎへと変えてきたのであった。女性性は、彼女にとって異質なものではない。むしろ彼女は、どこにおいても男性的な力を示してはいないのである。快活な無邪気さにおいて、彼女は自分自身にみずから気づいていないだけなのである。彼女は、けっして一つの類 (*Gattung*) の理念ではなく、むしろ個人的な雰囲気、あるいはある段階の年齢の理念なのである。一つの性を他の性へと結びつける繊細な憧れは、その発展過程において、内向する意識の穏やかな影響を受ける必要があるのである。しかし、青春の感情の最初のほとぼしりは、*ディアエーネ*のまなざしのように、遠くをさまようのである。それゆえ、最初期の乙女の時代は、ある種の無感覚を、いやそれどころか、女性の柔和さのかなりの部分はさまざまな感覚の発達によるのであるから、ある種の厳しさを伴うことも希ではないのである。ただ、いくつかの特徴は、非常にすばやくこの時期をすり抜けていくので、この厳しさはまだほとんど感ぜられず、別の時期にさらに長く現れるということもあるのである。この状態は、独特の形態を生み出し、それを*ラトエーネ*<sup>17</sup>の娘は、芸術家の手によって受け取ったのであった。女性の魅力は、甘美なまでの美しさで彼女のなかから溢れ出てくるというよりは、まだ内に秘められていて、自分自身にも気づかれていないのである。全身の骨格はしっかりしてきているが、ほっそりとしなやかな軽快さを有している。そして全体の印象は、魂が内部に沈潜しているというよりは、外部の別のさまざまな対象を目ざしていることを表わしている。しかしその際、神々しいまでの女性性の第一の性格、つまり気品を備えた優美さは、背後に隠れば隠れるほど表に出てくるという、きわめて高度なかたちで姿を現すのである。*ディアエーネ*の厳しさをもまた、すでに詩人たちの想像力は、和らげて表現してきたのであった。夜の孤独と、耳をつんざくばかりの獵のまっただなかの沈黙が、女神を内部に沈潜させるとき、彼女は*エンディミオン*<sup>18</sup>の魅力に心を動かされるのである。生真面目な*パラス*<sup>19</sup>の弱さを誰も責めることはできないのである。

339 *シセリア*<sup>20</sup>の優美さと*ユーノー*<sup>21</sup>の気品を比較すると、女性らしさが新たな拡大された領域へと移行していくのがわかる。前者において、それは活発で活動的である。後者においては、それは穏やかに全存在から滲み出てくるものであり、ただそれ単独で現れるものでも、愛情あるいは激情のそれぞれの瞬間に現れるものでもなく、きわめて密接に、神々しいまでの人格 (*Persönlichkeit*) のなかに織り込まれ、性格 (*Charakter*) にまでなったのだ。たしかに、詩人たちの書いたものを読む者にとっては、復讐の念に燃える嫉妬で敵を追い、煙を上げる*イーリウム* (トロイア) の廢墟を見て楽しんでいる女神の姿のなかに、これらの特徴を見出すことは、難しいに違いない。しかし神々の普遍的な性格は、感覺的

な民族の戯れの想像力が作り上げてきた物語とは区別されなければならない。なぜなら、ユピテルの好色が、神々の父にとって本質的なものではないように、ユーノの嫉妬と復讐心は、天の女神にとって本質的なものではないからである。しかし詩人たちの書いた物語においてさえ、その女神は、崇高さという特徴も柔和さという特徴も否定することはなく、ただ瞬間瞬間に、その特徴を激情の力が曇らせるだけなのである。ただ最高の女性的な優美さと気品に包まれて、彼女は造形芸術家の手によって姿を現わすのだが、造形芸術家は、みずからの想像力に、容易に理解される理由によって、詩人よりも、恣意性を許さなかったのである。たしかに、ここでもまた、厳かな気高さが、その女神のまわりを聖なる弧を描いて取り囲んでいる。しかし、ひそやかな崇拜者は、彼女に心を捧げ近づくことに成功したのであり、そのようにしていまや突然、彼を優雅な美が包み込むのである。造形芸術家と詩人が同じ神聖を取り扱った違いは、明らかに、性の道徳的かつ肉体的形成についての概念の発展の仕方の違いに基づいているのである。なぜなら、肉体的な表現に限定されていた芸術家は、必然的に、外的形態の理念がより純化して生み出されているというまさにその点において、詩人を凌駕していなければならなかったからである。それに対して、詩人がその女神について描いたイメージは、性の道徳的規定に向けられていたのであった。彼の模範は、貞淑な妻であり、秩序と家庭的であること（Häuslichkeit）を愛する友であるのだが、しかしまた同時に、それらの正義＝法（Rechte）の熱心な守護者なのであった。そしてこの存在を、彼は神々の女王のなかに理念化したのであった。

340 こうしてわれわれはこれらの副次的概念についてわれわれの想像力（Phantasie）を純化したのであるから、われわれにはこの神性のなかに真の女性性の像が、ただ崇高な段階において現れるのである。女性性は決して個々の特徴においてその姿を現すのではなく、形態全体のまわりに柔らかなヴェールを投げかけているのであり、そのあいだから神性が自由に妨げられることなく姿を覗かせているのである。それゆえそれはまた、ある一定の個々の状態がそのつど内包する制限のなかに現れるのではなく、むしろありとあらゆるまだ発展していない資質を包み込んでいるのであって、悟性と想像力に、無限の領域を追求させるのである。なぜなら、愛の神のように、魅了されていく憧れによってでもなく、ラトネの娘のように、若さによる無邪気さによってでもなく、ユーノが女性（das Weib）を滲み出すのは、穏やかで、全存在のまわりに広がる豊かさによってだからなのである。欲望の影もまた消え去り、内的な自己満足を、彼女は現世の制限の領域から取り去るのである。彼女の高貴な姿、彼女の大きくて丸い目、そして彼女の口の気高い印象は、彼女に、あらゆる乏しさの痕跡を消し去る気品を与えているのである。しかし彼女がここで女性らしさをいわば否定しているようでありながら、彼女にそれがあるのは、彼女のすべての他の美しさのお陰なのである。女性的なもの（das Weiblich）とは、彼女の存在の豊かさであり、女性らしくゆったりと溢れ出てくる力、人を快くする力なのであり、そして同時にその両方ともに、愛らしい優美さと青春のあらゆる魅力に飾り立てられているのである。なぜなら、すべての神が、ありとあらゆる人間的なものを楽しみ、かつそれに苦しむという特権を享受しながらも、現在という瞬間を越えて、死すべき者たちと同様に、制限的な結末を体験することがないように、ユーノもまた永遠に純潔の花嫁として、ゼウスの抱擁のなかに戻ってくるからなのである。

それにもかかわらず女性的なものは、彼女の内部の彼女本来の資質のなかにはないように思われるし、性格によってずっと変わることがなく、自然の手によって作り出されているものではないように思われる。むしろそれは、神性と一つになり、自然によって高められるのである。それゆえ、その女神の姿は、より大胆に立ち上がり、目はより自由に大きく弧を描き、口はより誇り高く命ずるのであり、性

341 の制約から解き放たれ、彼女はただ性の長所だけを付与されているのである。神と女性の特質<sup>22</sup>の表現は、相互のなかに消え去り、それぞれが他方によって互いに高められ、あるいは抑制されるのである。容易に自制を欠く、溢れんばかりの豊かな女性性は、自己自身を支配する豊かさへと変えられ、外的な必然性に左右される女性の力は、むしろ内的な必然性と結びつくように思われる。それに対して、恐るべき偉大な神性が恐怖を引き起こしうるところでは、女性の柔和さが、それを追い払うのである。彼女を通して、神々の額が告げる確たる恣意に左右されるのではなく、物事の高位の秩序と結びついているのである。そして女神を取り囲む厳粛な深刻さは、あらゆる厳しさの外観を失うのである。というのも、それは、女性的な振る舞いと慎ましさを発しているからなのである。

つまり、ここで、女性性が、新たな姿で現れるのである。われわれが見るのは、女性的なものの独自の理念ではないし、その長所並びに必然的な制約を示すべく定められている姿ではない。それは、精神的特質<sup>23</sup>一般の理念なのであり、その精神的特質が、ある肉体を受け入れるために、一方の性に属することをどうしても明らかにせざるをえず、いま、女性<sup>24</sup>を選んだ、ということなのである。なぜなら、性の形式には左右されない、さらにもう一つの中間の形式というものが存在するに違いないからである。それは、人間性 (Menschlichkeit) の純粹型、あるいはこれを理念的に高められたものと考えられるならば、古代人の考えた神性 (Göttlichkeit) の純粹型なのであり、それを目ざしてそれぞれ個々の性は、みずからを高めていくべきものなのである。しかし、まさにこの要請がここで達成されるのは、神性が、自然の性格としての女性の性格を消し去り、意志の性格として表わし、それに無限の広がり認め、そして、その制約を取り払うことによって、その長所そのものに新たな輝きを分ち与えたときなのである。壮麗な形態のそれぞれの性格は、女性的である。しかし同時に、紛うことなく、そのそれぞれから神性が語りかけてくるのである。そしてそのようにして、女性たちと女神たちのもとでは、人間性と神性とがますますその度合いを高め、まさに女性性がその存在全体をより生き生きと輝かせることになるのである。

342 これらの理念においても、現実そのものにおいても、女性の美しさが心に生み出すさまざまな印象に静かに身を任せ、それらのある一定の普遍的な概念に帰せしめようとするのであれば、あらゆる方向から感覚に訴えかけてくるのは、愛らしさ (Lieblichkeit) であり、優美さである。均整の取れた華奢な骨格が、美しく起伏をなす曲線に包まれ、あらゆる部分が豊かさや柔らかさを示し、淡くはあるが鮮やかな色が混じり合い、きめ細やかで滑らかな肌が全身を覆い、長く優美に流れる巻き毛が垂れている。—— このような特徴こそは、たとえ多種多様な姿のなかで現れるのであろうとも、見る者の想像力にとどまり、いかなる真の女性的形態においても、否定されえないものなのである。それゆえ、女性的形態の特徴的指標は、輪郭の連続した安定さなのであり、一つの部分は別の部分から、いわば流れ出ているように思われるのである。その安定さが、姿のうちから輝くばかりに溢れ出てくる力を魅力的な豊かさへと変え、あらゆる個々の特徴を、自然な容易さで、調和ある一つの全体へと結びつけるのである。

ただ感覚にのみ訴えかけてくるこの物質的な魅力は、それが優美さとなるためには、精神のさらに高次の要請に満足を与える形態を獲得しなければならないのである。それがなければ、物質的魅力は、美の領域へと入っていくことができず、ただそれだけが、物質的魅力を優雅さへと高めるものなのである。たしかに、女性の肉体の形成において、芸術的規範となっているものは、包み込む外側の柔らかさと、輪郭のはるかにゆるやかな流れによって、隠されているのである。しかし、それは消えてはならないものであり、真に美しい女性の構成において、技術的な完璧さは、まさに古代のいくつか遺されている芸

術作品において、少なくとも触覚の導きの助けを借りるならば、実際に目に見えるものとなっているかのように、透けて見えてくるに違いない。構成の感覚的調和<sup>25</sup>から、純粹に規範となっているものが窺えるに違いないように、もしもその姿が完成されたものということであるのなら、この両方によってさらに性格の道徳的調和<sup>26</sup>という表現が要請されるのである。そして気品と自立性が、体つきと顔つきから、輝き出てくるのである。尊大な支配志向を表わすこともなく、すっと立つその姿は、いつもは生きていてすべてのものを結びつけている束縛から解放されていることに満足を感じるのである。その姿は、みずから力で立ち、進んで、みずからの自由と調和する、ある秩序の法則に従うのである。つまり、精神の表現は、女性の形成においては、ないことに気づかされるであろう、などということではまったくなく、それはむしろ、ただあの好ましい優雅さのみ、みずから進んで順応していくのである。

343 純粹に人間の形成ということについて期待されている以上に、大いなる優美さというこの特徴に関して、女性性は、至るところに難なく認識されうるのである。ところで、たしかに、高次の男性的な美しさにおいて、男性性は、すぐに明らかになるに違いない。ただここには、きわめて注目すべき違いが現れるのだが、それは、男性性は、もしそれが存在するのであれば、容易に気づかれるというよりも、それが無いところでは、無いことに気づかされるというものなのである。本来の性の表現というものは、男性において際立っているものではなく、純粹に男性性の理念を、かのヴェーナスにおける純粹に女性性の理念のように個別化するという事は、ほとんど不可能なことであろう。両性の形態を一見しただけでは、男性における性構成は、他の全身体とははるかにわずかにしか結びついていないということに気づくのである。女性においては、自然は、紛うことなき慎重さをもって、性を示す部分だろうと示さない部分だろうと、ありとあらゆる部分の一つの形式のなかに流し込み、美さえもそれに従属させたのである。男性においては、ここで慎重さを大いに欠いたのであった。自然は、男性に、ただ性に属するものからむしろ独立することを許し、この性に属するものを、全体との調和には頓着することなく、ただ暗示しただけで満足したのである。しかし、もしかすると、自然はまた、男性の性格を、ただより繊細に、男性の他の本性のなかに織り込んだのかもしれないし、それを、より大いなる力の表現で、すなわちはるかに活発ですばやい努力 (Anstrengung) で、控えめに示したのかもしれない。しかし、この格別の特性は、かならずしも男性の性に帰せられるものではない。なぜなら、それは、いかなる面からも、純粹な人間性の性格と矛盾するものではないからであり、純粹に人間的な形式に独自のものでありうるからである。ちょうどそれと反対の性格が、女性の形式に独自のものでありうるようである。そしてそれゆえ、性差から大いに独立しているということは、直接的にともに男性の陶冶の概念に属していることなのである。

男性の形態が力と自由を現わせば現わすほど、日常の判断でさえも、彼がいつそう男性的であることをいよいよ明らかにするのである。力は、女性的な美しさにおいてよりもさらに多く、多くの人を打ち負かしてきたに違いないのであって、われわれはむしろ力が、純粹な優雅さを傷つけることによってさえ、きわめて明らかに現れ出てくることのほうを、力が逆に優雅さに屈してしまうことよりも、許してしまうことになるのである。それゆえ男性的な美しさというものは、力が強められるその度合いに応じてますます高められるのであり、享受するということのほうを活動するというよりも優先すればするほど、ますます低下していくのである。どのようにして力を増大させるかというそのやり方さえどうでもよいことではないのである。努力によって鍛錬するどころか、力に十分に栄養を与えれば与えるほど、ますます男性的ではなくなるように思われることであろう。そのようにして、古代人はパックス<sup>27</sup>

344 を考え出したのである。彼を特徴づけているのは十分な豊かさである。陽気な陶酔状態で、彼は大地を歩き回り、遠くの力強い諸民族を、彼の意志の努力によってよりも、むしろ彼の本性のあり余る力によって、征服したのであった。彼の形態は他の神々よりもさらに繊細で若々しいものであり、彼の腰はより女性的な曲線を示しており、彼の骨格の全体的構造は、よりふくよかで丸みを帯びている。彼は男性の行動力を備え、まさにその性の独自性を性格において表現することによって、それにもかかわらず、女性的なものの境界へと近づいていくのである。ヴィーナスのように、彼は自然の力を現わしており、まさにヴィーナスと同様に、高位の神々よりもはるかに密接に、自然と結びついているのである。しかし、まさしくヴィーナスが純粋に女性的なもののもっとも忠実な像であるように、バッカスは男性的なものからの逸脱を現わすのである。そしてそもそも、男性というものは、つねに、その性に支配されればされるほど、ますます性から外れていくものなのであろう。このことは、全体的に、女性にもまた当てはまることであるにもかかわらず、そして感情の激しさにおいて、女性的なもののもっとも愛らしい特徴が消滅するにもかかわらず、ここではその境界ははるかに広がり、女性においては、その性に委ねられる程度がきわめて高いのに対して、男性はその性をほとんど至るところで、人間性のために犠牲にしなければならないのである。しかし、まさにこのことが改めて、彼の形態が、性の制限から大いに自由であることを証明するのである。なぜなら、その本来の自然の規定を思い出させることなしに、彼は、最高の男性性を示すことができるからである。それに対して、女性的な美しさの精確な観察者にとっては、その本来の自然の規定は、たとえばに繊細にとにかく女性性が存在全体を覆ってしようとも、つねに明らかになるからである。すでにおのずから、男性の体格はほとんど完全に、人間の肉体についてそもそも抱きうる期待と一致しているのであり、男性の特殊性 (Partheilichkeit) だけが、男性の体格をいわば、女性の体格の違いからむしろ逸脱と思われる規則へと高めているのではないのである。きわめて公平な観察者ならば、女性の体格は、多くのことを形態によって克服すべく、生きとし生けるもののある一定の自然の目的を表現しており、男性の体格は普遍的な自然の目的を表現していることを、告白しなければならないのである。

345 しかしまた、男性の形態にも、いまだになお、性の独自性<sup>28</sup>の形跡が十分に残っている。それは、最高の美しさが現れるべきところにおいてであり、純粋な人間性においては、消失しているに違いないものなのである。もしも女性の肉体が、波打つ曲線によって縁取られつつも、ゆるやかな平面を示すものであるとするならば、男性に特有の力の激しさは、肉体に浮かび上がる臍を高め、少ない肉に覆われた強い骨格があらゆる輪郭をさらにくっきりと暗示するのである。あらゆる角張ったところは、一定の部分に分けられ、大胆な描き手が、厳密な正確さをもって、しかし優美さを気にかけることなく描く素描に似ているのである。ここで極端に描かれているものは、当然、また自然の真理を克明に観察することによって、大いなる洗練を許すのである。しかし、最高に洗練されても、ある決定的なことが残ることになるであろうし、それは厳しさの境界に近づいているものなのである。そのような理念は、芸術通の判断によれば、*フェルネーセのペラクレース*である。長い仕事の後、彼は、みずからの力強い道具に支えられて、休息している。巨人たちや怪物たちを、彼は打ち負かしたのであったが、口から発する命令や手振りや敵を易々と滅ぼす神々の力によってではなく、死すべき者の努力によって闘ったのであり、大変な苦勞をして勝利を勝ち取ったのであった。剣闘士の肉体もまた、同種のものである。努力と筋力の鍛錬の跡は、彼らの内から輝き溢れ出ており、享受の楽しみ表現は至るところにあり、男性の力がかすかにしか現れていないところにおいてさえもそうである。強さ、決然さ、そして容易に厳しさになり

うる輪郭の鋭さが、つまり男性の形態の第二の本質的指標を形成するのである。すでに自然の手あるいは道徳的文化が、これらの特徴をほどよく和らげてこなかったところでは、それらは、男性的な美しさからふたたび、性から大いに独立していることによって獲得した自由のなにかを奪い取ることになるのである。

346 神的なものの本性においては、すべては、類の概念の純粹さと完全さを志向する。両性の性格もまた、類の概念のなかで消失し始め、神々の若々しい形姿においては、男性の肉体の鋭い線は、決然さを打ち消すことなく、厳しさを取り去る柔和な優美さのなかに消え去るのである。ヘラクレスがオリンポスへと舞い上がり、ヘーベの抱擁のなかで苦勞の多い地上の生を忘れるとき、彼の肉体的形態はまたはるかに純化した美を包み込んでいるのであり、解き放たれた五体は若々しい軽やかさで動き回るのである。この理想に近づくことは、人間にもまた試みることができるのであり、人間的な美しさを男性的な美しさに結びつけることによってようやく男性的な美しさを完成させる手助けをすることになるのである。大体において魂は、内部からこの長所を生み出すことができるのである。しかし、さらにこの長所は、道徳的性格の表現を強めるべきものではなく、本来の美を高めるべきものであるかぎりには、自然の賜物なのである。とりわけこのことは青春時代に当てはまるのであり、子ども時代の形態がある程度より女性的であるとするならば、青春時代というのは、両性の狭い境界上にあるのである。かくして、男性の本来の美しさが、そのもっともすばらしい輝きを示すことになる。あらゆる窮屈な制限は取り除かれ、すべては、優雅さによって和らげられてはいるのだが、強さを備えた活力のもっとも生き生きとした表現へと凝縮していくのである。そのような真に男性的なものの理想を、われわれはヴェネチカンのアポロに見る。最高の男性的な力と決然さが、彼において、もっとも美しい神々の青春の表現となっているのである。その形態のありとあらゆる特徴は、柔和に、そしてしばしばただ繊細な感覚にとってのみ感じ取りうるように描かれている。さらに、彼の手にある弓と背中の中の矢筒がわれわれを恐れさせるのだが、それでも神の静穩な崇高さが、われわれを安らかな畏敬の念で貫くのである。

もしもわれわれの感覚が、至るところに美をもまた要求するほどに、十分に美に慣れているのであれば、われわれは、男性の形態にきわめて頻繁にとまうことになる厳しさを見逃さなくなるであろうし、その厳しさに類 (Gattung) よりもむしろ性 (Geschlecht) をより多く想起させられることになるであろう。しかしながら、われわれが彼における形式の美 (Schönheit der Formen) によりもむしろ決然さ (Bestimmtheit) に注目するのであれば、重要なのはわれわれの内部における美的刺激の欠如というよりもむしろ、彼の形態の全精神なのである。この決然さは、女性において魅力 (Reiz) と優雅さ (Anmuth) がそうであるのと同じように、男性の形態の特徴的な指標なのである。それゆえ、女性には優美さの欠如が許されないのと同じように、男性には、決然たるところがないことと空虚さは許されないのである。このことが、男性の内部に自立した力の高度な表現を生み出し、すべての個々の部分を、われわれが非常に好んで女性の肉体の場合にはとどまることになる形式の感覚的統一によりもむしろ、生き生きとして自立した存在の概念の統一に結びつけるのである。

347 しかしながら、これらの特徴によって、男性の形態に予感されるのはただ完全さ (Vollkommenheit) だけであろうし、もしも体格の厳密な正確さがすぐには魅力的な優雅さと結びつきえないのであれば、美に関しては失望が起こることであろう。しかし、このことは、男性の美において実際当てはまるのである。悟性 (Verstand) を満足させる概念の抽象的統一が、実行の生き生きとした統一によって、感情を満足させるのであり、最高の決然さと輪郭の多様性をもって、ある形式から別の形式へのこの上

なくささやかな移行が起こりうるのである。もしも、われわれのもとにあって、体操訓練の欠如、形態を歪める過酷な労働、不安や機械的作業からのわずかな解放、そして美にとっては不利な時代全体の傾向が、このことを生きている男性の肉体において証明することを一層困難にしてきたのであれば、われわれはただ古代の芸術作品に向き合えばよいのである。厳しさの影もまたそこでは排除されており、男性の形態の輪郭は同様に穏やかに流れているのであるが、ただ女性においてよりも素材がより節約されているだけなのである。とりわけこのことは、男性の最高の理想において明らかになるのであり、そこでは、肉体的特質を知的かつ道徳的特質が支えているのである。つまり魅力と優雅さは、女性の形式と結びつくのに劣らず、男性の形式とも結びつくのであるが、ただそれらは、女性の形式に対しては、法則そのものを与え、男性の形式に対しては悟性の法則を遂行するように思われる。

両性の形態のこの描写に際して、同時にまたそれらの内的特質が想起されないということは不可能である。そのことによって観察の純粹さを乱すことのないように、観察者がそれらを比較することをどれほど避けたいと思っても、類似性は、彼の意に反してさえ、彼の脳裏に浮かび上がってくるにちがいない。なぜなら、そもそも有機的存在のいかなる形態も純粹に、ただそれ自身に依存しているわけではなく、それぞれが有機的存在の概念によって、そしてその有機的存在に内在する力によって規定されるからである。無機的な自然においては、あらゆる形態はたんなる物体であり、恣意的なものではないのだが、しかし少なくとも内的法則によるものではなく、外的作用によって相互に重なり合っているのである。物体としての影響力以外には、力による痕跡はなにもない。それゆえ、この種の形式には、想像力 (Phantasie) がそれらに恣意的に漠たる類似性によって付与しようとする以外のいかなる意味もないのである。このことに極めて近くはあるのだが、植物界においてはすでに事情はまったく違っている。植物は、みずからの生命力によって成長し、幾重にも分かれた根と枝を伸ばし、異質の素材を受け入れかつ固有の素材を区別するのである。ここにおいては、自然のままの分離されない物質がはるかに安全な地面の上に安らっているところではないのであり、形態はもはやたんに機械的な法則によっては捉えられないのである。そこには内的に形成していく力が現れる。しかしながら物質 (Materie) はこの力を志向するのであり、それゆえ、あらゆる有機体は闘いの光景を呈することになり、その闘いにおいては、あるときにはある部分が、またあるときには別の部分が優勢を保つのである。物質が抵抗するのをやめるのであれば、それはその力を助長するのであり、その力に、まさに内的営みにおいて自立を受容するように、形ある素材を与え、その力を軽快さによって和らげるのである。これら二つの要素の性質と関係、その力の及ぶ範囲、そして物質がその力を具現化するあり方が、多かれ少なかれ価値ある形成 (elder Bildungen) の段階を規定するのであり、その段階に応じて、自然の形態にその位階が示されることになるのである。しかしこの動きにおいて注意しなければならないのは、外的形成を越えないことである。直接的に形態はここで重要な力を告知しなければならず、そしてまた実際にこのことを行うのである。全体がいくつかの個々の部分に分かれ、軽快さと活発さを獲得するところにおいては、そしてこのように分かれて、そもそも輪郭において、均斉と規則が支配するところでは、造形力が明らかになり、それがこれらのたんなる物質の法則からは説明できない諸現象を生み出し、活動にその広がり<sup>1)</sup>と限界<sup>2)</sup>を規定するのである。前者はとりわけ人間的形態において明らかになり、それは、ただたんに、あらゆる有機的形成のように、造形力と柔軟な実質 (Stoff) をそもそも示すだけではなく、また無制限のただ個々の動きのためだけに規定されているのではない力と、その力に抵抗するのではなく、むしろそれを迎え入れるように思われる実質 (Stoff) をも示すのである。

349 他のすべての動物界を通じて、それぞれの存在に、辿るべき一定の数の道が示されていて、それ以外のあらゆる道が拒まれているのを、われわれは見るのである。しかし、それぞれの存在は、みずからの限界を実際に打ち破ることができないだけでなく、このことを願うことさえできないのであり、その傾向はその能力と同様に制限されているのである。それに対して、人間の活動にはけっして一定の方向だけが定められているわけではない。人間の本性に直接的に拒まれているように思えることに対して、人間は、内的な困難を訓練によって、外的な困難をありとあらゆる手段によって取り除くことができるのであり、完全に不可能なことでさえ、少なくとも希求すべく試みることはできるのである。ところで、この独自性を示すのもまた直接的に彼の形態であり、そのさまざまな骨格の特徴は、強制という考え方そのものを受け入れず、ただ自由によってのみ説明できるその形態の特質なのである。<sup>29</sup>たしかに、このことが明らかになるのは、なんらかの個々の特徴のなかにおいてではなく、体格全体の形姿においてであり<sup>30</sup>、あらゆる部分の自由な調和のなかにおいてなのである。それゆえそれはまた、ただ見られ、感じられるだけなのであって、言葉では表現されえないものなのである。しかし、たとえ人間が、彼に特有のこの自由によって、有限性という制限を越えるように思われようとも、彼はそのようにしてそれゆえまだ自然という限界から抜け出しているのではなく、これらの限界が人間の体形のなかで、ただ広げられているだけなのである。なぜなら、物質が精神の自由な活動をその鈍重さと緩慢さによって制限することで、物質はまたその穏やかな持続性によって、恣意が現れる激しい力を和らげるからである。そして精神はその厳しい合法則性 (Gesetzmässigkeit) によって物質に強制を加えることで、同時に絶えず形式を破壊しようとする物質の過剰さを制限するからである。

350 人間は、男性と女性とからなる存在として、自由と自然必然性とを結びつけているのであるから、ただ双方の完全極まりない均衡によってのみ、純粋な人間性の理念に到達するのである。もしも道徳的品位が主張されるべきであるならば、たしかに意志がしなければならぬであろうが、しかし抵抗する自然に対してではなく、人間と調和する自然に対してであり、まさにこのことが外的形成 (Bildung) をもまた告知しなければならぬであろう。しかしここで、構想力 (Einbildungskraft) は、現実から見放されているのを知るのであるが、それは、現実が構想力に対して、どこにも、そのような純粋な、ありとあらゆる性の特徴を超越した存在の形態を示すことがないからであり、それゆえ、構想力にとっては、ただそのようなイメージを描くだけでも困難なことにさえなるのである。なぜなら、構想力が一方の性の性格を消し去ろうとすることによって、それは他方の性の性格をそこに据えるという危険を犯すからであり、あるいは、もしもこのことを避けようと欲するならば、残されている特徴 (Merkmal) を定かならざるところにまで弱めるという危険を犯すからなのである。しかし、それにもかかわらず、ときには現実においてさえ、たとえただある形態のいくつかの特徴だけであるにせよかすかにきらめき現れることがあるということは否定できないのであり、その形態は、純粋に人間的なものとして、男性と女性の形態の真ん中に位置しており、だれもがおぼろげながらそのイメージをみずからの魂のうちに抱いているのであるから、だれによっても誤認されることはないのである。ときどき、もしこう表現することがゆるされるのであれば、なにか超女性的なものが見出されるのであるが、それを実際だれも、非女性的とか男性的とか呼ぼうとはあえて思わないのである。そして、まさにそのようにして、男性たちのもとで、その性には帰しえない諸特徴に出くわすことになるのである。このあり方には、例えば、ある種の落ち着いた偉大さというものがあり、それは、自然によってではなく、意志の強さによって生ずるものであり、女性の形態においてはけっして非女性的とは思われぬであろうものなのであるが、

しかし男性の形態においてもまた、男性的というよりもむしろ人間的と呼ばれなければならないものなのである。この特徴および似たような諸特徴を（おそらく、男性の形態のうちのなにが、完全に女性的なものを保持しつつ、女性の形態に移されうのか、とみずからに問うことによって、それを探し出そうとすることが、あるいはもっとも正しいのであろうが、）一つの像（Bild）へと凝縮させるのであれば、明確な芸術的特徴が現れることになるのであろうが、しかしそれは、厳しさや暴力性からは同じように遠くに離れているであろうし、この厳しさや暴力性と優美さとが結びつくことになるであろうが、その優美さは、厳しさや暴力性を排除しようとするこなしに、同じように、それから排除されることもないのであろう。しかし、一方が他方に屈するのであれば、そのとき、それぞれが弱まることになるであろう。両方を完全に捉えようとする努力によって、観察者はどちらをもその純粋さにおいて見ることはなくなるであろうし、融合が結合の代わりに現れることになるであろう。

本来の違いは、理想の統一体においては消失することになるのではあるが、人間の形態におけるこれら両方の特徴のうち、それぞれの性において、一方が主として支配的なのであって、他方はただそれがないということに気づいていないというだけのことなのである。それによって両方が、ある目に見えない全体の半分のように、相互に関連し合い、その相互の欠如のゆえに、その半分を理想において補うよう心情を強制するのである。男性の形態においては、精神のより厳しい面が支配的であり、女性の形態においては、精神のより自由な面が支配的なのである。前者においては意志が、後者においては自然が、より大きく語りかけるのである。より強大な力と、個々に定められた自然の目的への依存のより少なさが、男性がどのような状態にも耐え、自己再生産することをずっと可能にしているのと同様に、女性を現わすものはまた、そのより高度な生育、だんだんとふくらみを増していく胸、より強固な骨格であり、筋肉のしなやかな動きなのである。より小さな範囲においてではあるのだが、より大きな豊かさに恵まれ、よりなめらかな輪郭を与えられ、女性は、同じように大きな動きを享受するのだが、しかしその動きは、よりわずかな力によって、はるかにしなやかなものとして現れるのである。男性においては、意志がこの上なく完全な勝利を得たのであり、資質を、ほとんど本来の性を完全に抹消するほどにまで、つくり上げてきたのであった。女性においては、資質は、みずからの独自性をより主張する術を心得ていたのであったし、それは受け入れることによって、みずからの屈服という表現を避けるのである。ところで、このようにして、双方の性のそれぞれが、たしかにそれぞれのすべての独自性において人間の全体を示すのではあるが、しかしむしろ一方的な方向性においてであるのだが、必然的につねに一方が他方へと向かわなければならないのである。まさに一方の側が優勢であるということによって、不可避的に、いつかまた他方が支配的になるのを見たいという欲求が、そしてそうなることによって、たとえ現実においてではないにせよ、しかし少なくとも想像力において、乱されたバランスを再び生み出したいという欲求が生ずるのである<sup>31</sup>。

両方の性が純粋で性を超越した人間の理念に対する関係は、またそれら双方の美が、美の理念に対する関係と同じである。両者のなかにおいて人間が表現されている、とわれわれは聞いた。なぜなら、それぞれが、両方の、人間のなかで一つになる本性を現わしているからである。ただ、これら両方の本性のうちの一方が優位を占めている、というだけのことなのである。まさに、そのようにして、いまやまた両方に美が近づいてくるのであるが、しかし、それぞれのなかにおいて、それらのうちのただ一つの要素だけが支配的なのであるが、それにもかかわらず他の要素を排除することはない。人間において自

然必然性が自由と結びつくように、美において素材 (Materie) と形式 (Form) が一緒になるのをわれわれは見るのである。高貴な人間においては、理性の命令は傾向性 (Neigung) の自由な願望として、激情の声は理性的な意志の表現として現れるように、高次の美においては、形式の合法則性は、素材の自由な動きとして、そして恣意の誕生は法則の作用として現れる。それゆえ、人間性が姿を現すところでは、美もまた可能になるであろう。なぜなら、人間性と美は相互に、現実と現象のように、原像と模写のように、対応し合い、人間性が明確化<sup>32</sup>されるように、美もまたつねにそうなるであろう。より厳しい意志の支配の表現は、男性の形成 (Bildung) において、より形式の決然さ (Bestimmtheit) を生み出すことになるであろう。より大いなる自然の自由の表現は女性の形成において資質の静態性 (Stätigkeit) を支えることになるであろう。しかし、もしもそれぞれがこれら両方の長所をみずからの内部で一つにすることがなく、そしてそれがただたんに一方を他方から区別し、そして両方を理念から区別する、それら一方の側の優位 (Uebergewicht) でしかないということであるならば、両方の形態は、美に対するあらゆる要求を断念しなければならないであろう。なぜなら、すべて現実的なものがその制限によって巻き込まれる闘いを超越し、類を互いに区別している独自性から解き放たれて、美の理想ならびに人間の理想は、完全極まりない平衡 (Gleichgewicht) を主張するからである。それゆえ、形式衝動 (Formtrieb) と事象衝動 (Sachtrieb) は、同じように満たされ、自由な遊戯 (Spiel) において、相互の機能を交換するのである<sup>33</sup>。

もしも美の双方の原理の平衡が崩されはするが、しかし同時にまたその結びつきが破棄されないのであれば、単純な理念的美の代わりに、二つの違った、しかし完全ではない類が生まれるのである。双方が、美の感情を特徴づける調和を生み出すのであるが、しかしそれぞれがこの目的に向かって違った道を通して近づいていくのである。一方が、理性の合法則性の圧倒的表現によってみずからを打ち出すことによって、同時にその描写の優美さによって、構想力は関心を引かれるのである。もう一方は、外見的な恣意性によって構想力におもねることによって、それは構想力を同時に真の必然性によって、法則に従わせるのである。このことをわれわれは、両性の美の感情に対する作用のなかで知るのである。男性は、より複雑な形式によって、まず第一にただ悟性 (Verstand) だけを求めるのであり、悟性の充足は、ようやく後になって真の美的感情のなかに消え去ることにおいてあるのだ。女性は、そのより単純な形式によって、構想力により多くの自由を与え、まず第一にただその素材 (Stoff) の豊かさによって、感情を引き出すのであり、長くとどまり深く研究することによってはじめて、美の真剣な要求も充足されるのである。しかし、この途上においては、つねに一方の側に優位が、それゆえ他方の側には欠如が位置することになるのであるから、双方いずれも美的感情を充足させることはないのである。というのも美的感情はその本性上、完全なものを求め、理念に至るまでは休息を知らないからである。それゆえ一方の形成からそれは他方へと移行し、一方の独自性 (Eigenthümlichkeit) によって相反する他方の独自性を止揚する (aufheben) ことで、少なくとも瞬間的にであれ理念を保持するために、両方を一つの全体へと結びつけようとするのである。二重の性の形成の理念的な美に対するこの関係は、それぞれがただ、他方と向き合い、それぞれが (より大胆なイメージを使うのであれば) ようやく他方のなかで完全なかたちで鳴り終わる和音だけを奏でるかぎりにおいてのみ、本来真に美しいものとして現れるということを引き起こすことになるのである。ここでもまた、両性は相互に依存し合っているのである。なぜなら、それぞれに制限され、両性はここでもまた、ただ内的な結合によって<sup>34</sup>完成 (Vollendung) を獲得するのである。しかし、まさに性の形成の制限が想像力にたえず理念を生み出す

ことを促すように、この能力の制限は必然的にふたたび性の形成へと舞い戻ってくるのである。想像力が、形式の支配を素材の自由に対してまったく同等に釣り合わせようとしても無駄であろう。なぜなら、想像力はつねにただ一方の側からしか出発することができないからであり、想像力はまさに一方か他方に優位を認めるであろうし、そうであることによって、みずからは気づかずに、男性と女性の形成に回帰するであろう、からである。

しかし、完成をめざす美的感情が一方の性の形成から満たされずに他方の性の形成に移行するのであれば、それはここにおいてはみずから両方の固有の特質によって支えられるのである。なぜなら、それらの特徴的な相違にもかかわらず、男性と女性の形成は、それぞれにおいて、性の特別な表現を人間性の普遍的な表現が支えるということによって、互いに接近し合うからである。人間性の普遍的な表現によって資格が与えられる理念との一致は、性の特別な表現の制限によって限定されることで、われわれが男性的美と女性的美と呼ぶ特殊な美が生ずるのである。性の性格がなければ、男性は独自の美を有することはできないであろう。たとえ女性の形成が、まさに女性的であるという限りにおいて、美により近いように思われるのであろうとも、女性の場合もまったく同じことなのである。至るところで、性を制限と捉えることに慣れなければならないのであるが、それは、性が、類の概念を内包する素質の総体から、つねにいくつかを一方的に除外しているからなのである。人間性において、性は、自発性と感受性が理念においては一緒に作用する相互の自由を止揚しており、それぞれが、みずからの存在において現れるために、（それらは互いに実際、けっして完全になしですますことはできないものなのであるから）一方は他方の下位に置かれざるをえないのである。ところで、自発性 (Selbstthätigkeit) が受容性 (Empfänglichkeit) を抑圧しているところでは、現象においてもまた、素材は形式に仕えているに違いないのであり、自発性が受容性に屈しているところでは、反対のことが起こるに違いない。しかし、すべての美は形式と素材の自由な結合に基づいているのであり、たとえ美が（最高のレベルのものではないにせよ）それら二つの要素のうち一方の側の優位と折り合いをつけるのであろうとも、それは実際けっして他方の完全な抑圧、あるいは同じことに帰着するのであるが、両方の実際の分離をけっして許すことはないのである。

しかしながら、すでに経験の範囲のなかで多様なかたちで確認できることを、さらに概念によって証明しようとすることは、およそ必要ではない。男性のなかにも女性のなかにも、われわれの美的感情は、ただ人間の性格が性の性格を高貴なものにしている限りにおいてのみ、美を見出すのである。陶冶されていない男性本来の性格は、道徳的な人間の性格との関係を除外して捉えるならば、諸特徴に厳しさと激しさの刻印を押すのであり、あまりにも鋭い形式の輪郭線は、素材のありとあらゆる柔らかさを一掃してしまい、それゆえまた必然的に悟性を合法則性によって満足させることもないのである。それに対して、女性の形成は、もしもわれわれが女性的なものをまさに人間の陶冶 (Cultur) を除いたものとして考えるならばなのであるが、ただ緩慢さと弛緩性をほのめかす不格好な豊満さを示しており、素材の豊かさが形式のありとあらゆる痕跡を隠蔽するのである。はるかに自由に飛躍することはどんな場合にもできず、形態はただ欲求の表現によってのみ活気づけられ、そのことによって無力な激しさという好ましからざるイメージを与えるのである。それゆえ、性の性格を別個のものとして考えることができるのであれば、生み出す力の表現はただエネルギーの激しい緊張のなかに、受容する力の表現はただあり余るばかりの素材の豊かさのなかに存在するのであり、前者が個々の目的に向けられた悟性を、後者が粗野な感覚 (Sinnlichkeit) を、一面的に充足させることによって、それぞれが美的感情を満たす

ことはないままになるのであろう。

- 355 性の性格は実際のところただ美のより高次の人間の性格との結びつきのなかでのみ可能であるという  
 ことは、性の性格をこれから切り離して捉えるときになお一層明らかになる。人間性の領域を離れるや  
 否や、美もまた失われていくのである。しかしそのときはまたすぐに両性の間に、それらの本質的な独  
 自性のなかで必然的に根拠づけられている違いが現れるのである。男性は、たとえそれが完全にたん  
 なる本来の性格に引き戻されるというかたちであるのだとしても、それでもつねに力の表現を保持してお  
 り、その力は、たしかに粗野な荒々しさをともなっていて、恐ろしく嫌悪感を抱かせるものなのではあ  
 るが、しかし実際つねに、ありとあらゆる道徳的要求が除外されるところではとくに、関心と驚きを引き  
 起こすのである。それに対して、女性においては、そういう場合に、素材 (Materie) が力を抑えて  
 いるのであり、この力のなさというものは、いかなる優美さをもってしても補われないのである。ここ  
 から、動物界においては両性が、美という点に関して、人間とはまったく逆の関係にある、という明白  
 な現象が説明されなければならないのである。なぜなら、人間においては、弱いほうの性が強いほうの  
 性に対して、美に関して、ただ完全に同等というのではなく、むしろその点において勝ってさえいるの  
 であるが、それに対して、まさにありとあらゆる動物のメスは、同じ類のオスに対してはるかに美しく  
 ないからである。この違いの根拠を有機的体系のなかにも求めようとしても無駄であろう。というのも、  
 肉体の本来の構造によって認識される性の違いの根拠は、自然の法則の類似性に従って、必然的に至る  
 ところで同じものであるに違いないからである。動物においてもまた、実際人間においてと同様の肉  
 体的独自性が見出されるのである。動物においてもまた、メスは、オスと比較して、絶対的に小さく、弱  
 く、華奢な骨格で、豊満さに恵まれている。それゆえ、動物の普遍的本性は、ただかの現象の根拠を含  
 んでいるのである。みずから威厳を要求することはできないのであるから、それは、メスの小ささ、弱  
 さ及び穏やかさによって全面的に失われ、ただなおオスの大きさ、力および決然性によって獲得されう  
 るものなのである。動物におけるメスの肉体的弱さは、道徳的強さによって高められることはないの  
 から、それは、たんなる無力の表現として現れ、その無力の表現はまた、肉体的弱さが美の能力を有す  
 ることになるとき、人間の女性の形態において<sup>35</sup> ようやく解消されているに違いないのである。しかし  
 356 動物の肉体に関しては、ただ肉体的長所だけが要求されるのだから、オスの独立性の表現が法則を欠い  
 た恣意の表現へと変化しても、それに対して何の問題もないのである。

しかしながら、動物のところまで下りていくことなしに、上述の主張がまた人間の本性そのものの例  
 によって確認される。まだなんの文化も持たず、野蛮な始源の状態で暮らしている諸民族のもとでは、  
 女性の形態は、美に関してはほとんどまったく男性の形態と比較しようもないのである。そして、たと  
 え文明化した諸民族のもとでも<sup>36</sup> また、ときに同じような不釣り合いが認められる場合、さらに克明に  
 研究すれば、おそらくまた同じような原因に到達することになるであろう。少なくともわれわれは、わ  
 れわれのもとでもまた、男性と女性の形態が放恣な不道徳さの刻印を示すところでは、人間性が高貴さ  
 を失っているところでは、そして理性の自由が抑圧されているところでは、そして少なくともまだ肉  
 体的な力の表現によってある種の自制を得ている男性よりも、女性のほうがつねになお嫌悪と反感を催す  
 印象を引き起こすということを見知っているのである。ところで、すべてこのような場合には、同じ現  
 象が回帰する。至るところで、女性の形態は、ただ最高の表現のためにつくられているのであり、人  
 間の美として現れないところでは、その美しさはそもそも疎遠なもの (fremd) なのである。しかし、こ  
 のことはもちろんただ美的判断においてのみ当てはまることなのである。つまり、性ではなく、人間が

決断を下すところでは、ということである。ここでは区別なく、一方の性の形成が他方の性の傾向におもねり、容易にここでそれぞれが他方に勝利を得るのである。ただ、より繊細な動きを示す魂において、美しいものに対する感情がありとあらゆる感覚 (Empfindung) を調和的に響き合わせてきたところにおいては、この傾向もまたさらに高い要求の下位に位置づけられているのであり、ただそこでのみ、たんなる性衝動は、人間的愛へと変容し、感覚の制限された領域から想像力による理念的な領域へと移行するのである。それ以外の場合には、この趣味 (Geschmack) の不純さは、ただなんらかのかたちでこちら側に接触するありとあらゆる対象へと広がっていくのである。そして、もしもわれわれが社会生活の領域において、教育、流行、礼儀について、芸術作品、演劇、著作などについて、要するに、もっとも広義の悟性において趣味の領域に属するすべてについて下される判断を克明に探求するのであれば、私心のない賞賛が真実の美を飾ることがいかに稀であるかを、われわれは驚きをもって認めることになるであろう。

つまり、性の性格は、男性的な美と女性的な美を理念的な美から遠ざける一つの制限として見なされなければならないのである。そしてそれが形式に影響を及ぼす限りにおいて、それは、形式に対して、みずからを理念にまで高めることを不可能にするであろう。しかし、ただ制限によって無限なるものの上昇していくこと、ただ素材 (Materie) によって形式に、ただ分離によって調和に到達するということが、有限な自然の法則なのであるから、性の美は、たとえそれがそれ自体だけは理念の美に永遠に矛盾するにもかかわらず、実際、理念の美に至る唯一の道なのである。さらに人間はただ、性に属している限りは、この制限に結びついているのであるが、しかし、同時に自由な、性を超越した人間性への傾向性を内包している限りは、その制限から解放されているのである。この傾向性のおかげで、人間は、性の限界によって拒まれている完成を、自由に手に入れるのであり、一面的な自然の性格を道徳的性格によって、理念にすべく補完するのである。そして、この道徳的性格が、自然の恵みによってであれ、あるいは理性の内的作用によってであれ、さらには外的形成によるのであれ、生き生きと語れば語るほど、性の性格の表現はその一面性をより多く失うのである。われわれは、人間性と性の結びつきから、新たな中間の美が現れるのを見るのであり、これは普通、男性の美と女性の美として理解されるものである。そこにおいて、理念の均衡はただ、有限な自然の制限がそれを必然的なものにしていただけ妨げ、そのものが、形態にきわめて個別的に特徴の混合を与えるので、そのことによってそれは新たな魔法を獲得するのである。それは、ただ人間性というのでもなく、男性や女性として現れる性でもないのである。独自の、内的に完結した形態は、その両方なのであり、たんなる人間性とかを一面的に想起させるものではないのである。個別的にはそれ自体あまりにも容易に物理的暴力の外観を得る男性の強さの表現は、人間の尊厳 (Würde) の表現によって和らげられ、男性を憂慮すべき無秩序へと陥らせる恣意の盲目的支配は、理性の支配に従う以前に、道徳的自由として姿を現わそうとするのである。そのようにして、芸術の理念においては、英雄の男性的反抗心は、神の柔和な崇高さに屈するのであり、それゆえわれわれは、この神のなかに、ほとんど最後の痕跡に至るまで消し去られている男性的なものの性格が、ただ純粋な人間性と一致しているのを再発見するのである。

しかし、女性の美においては、女性的なものは、さらに緊密に人間性と結びついているのである。そして、男性の場合以上に、双方からなる新しい中間の形成が生まれでて、特徴を同時に双方から借用しつつ、それぞれの一面的な表現を同じように欺くばかりに隠し去るのである。なぜなら、完成の最高の段階においてさえ、女性的なものの表現は、きわめて明白に、純粋な人間性の表現と並んで維持される

のであり、たとえそれが絶えずそのなかに混じり込んでいくのであろうとも、それにもかかわらずそれはけっしてそのなかに没してしまふことはない。ただこの独自性にもかかわらず、女性は、男性に劣らず、みずからの美に対して、一面的な性の形成から独立した完成を与えることができるのである。たしかに素材の圧倒的な支配が完全に破棄されることはありえず、つねに女性の形態に伴う肉体的な弱さと依存性が消し去られることもありえないのである。しかし人間性の力がかの肉体的な弱さを支えることによって、それは、道徳的な、みずからの力によって和らげられた強さのイメージを生み出すのであり、まさにそうすることによって、かの自然の依存性は、みずからが与えた法則への自発的な服従へと変容するのである。それゆえ、同様に束縛されない力が、男性と女性の形成から語りかけてくるのであるが、ただそれは前者においては制限のない作用範囲に広がっていくように、後者においては自発的に和らいでいくように思われるだけなのである。

しかし、両性はけっして有限性から逃れることはないので、両性における形態のこの理念的な完成には永遠の障害が対抗するのである。そして最高の美は、けっして現実には達成されえないのである。かのバランスが現象において具現されることになるには、有限なものが無限なものにならなければならないであろうが、そのときでさえ、人間の感覚はそれを捉えることはできないであろう。ただここでもまた、二重の性の性格の表現は、その目的に近づく方法を示すのであり、現象から理念へとみずからを高めようとする観察者にもまた、それは助けとなるのである。双方の性の形成は純粋な人間性の形成と似ているのであるから、それら双方は真の美の感情を彼（観察者）のうちに呼び覚ますのである。しかし、それぞれは特別な類を形成するのであるから、彼の注意もまたそれぞれによって主として美の双方の類の一方に向けられるのである。そのことによって、彼は理念の双方の要素を、個々に分かりやすい明瞭さで、受け取るのだが、理念の本質がそこにある統一は解体されることになる。かくして何ものにも妨げられることなく、彼はそれを想像力の創造する力によって、形成しようとすることができ、彼の外部の現実からただ制限された素材だけを借用することにより、みずからを内的な自発力で制限のない理念へと高めることができるのである。

それゆえひとは、性の形成そのものを客観的に見るのかもしれないし、あるいは、それが生み出す印象を主観的に見るのかもしれない。だから、ただ理念との比較においてのみ制限的な限界である性の性格は、有限的な自然の制限ということを考慮すれば、完全性への一つ的手段ということになるのに違いないのである。男性的なものの表現は諸特徴の規定性 (Bestimmtheit) によって形式の支配をむしろ強調するのであり、そしてそれに純粋な人間性の表現が穏やかに伴うので、それは、男性的なものの一面的な側面を主として現わすのにそれ自体どうしても必要である以上に遠く理念から離れることはありえないのである。女性的なものの表現は、諸特徴の優美さ (Anmuth) によって、より生き生きとしてイメージにおける素材の自由を示すのであり、まさに純粋な人間性と同じ表現の方法に支配されるのである。ところで、性を超越した人間を想起するよりも、男性はより情熱的に、女性はより柔和に現れるのであり、それゆえ、男性的な美は緊張を促し、女性的な美は安らぎを招くといわれるのがつねなのである。しかし、これらの表現はただ、異なった性の形成の洗練されていない感覚への、そしてとりわけ、一方の性の形態が他方に引き起こす印象への、共通の作用を現わしているだけなのである。もしも男性の緊張した力が快い安らぎを求め、女性の不確かな憧憬が決定的統一を求めるのであれば、それらの相互の形態は、双方に対して満足を与えなければならないのであるが、その満足は欲求に副うものなのであるから、つねに利己的であり、美的判断にとっては不都合なものなのである。

人間が美しいものの観察に身を捧げているところでは、人間はありとあらゆる党派性から離れ、性を超越してただ人間性にのみ属さなければならないのである。ただそのような幸福な瞬間においてのみ、人間は、みずからの存在を最高のバランスへと合致させ、それによって自然に似、それによって神性に似るさまざまな力を一つに溶け合わせることに成功するのである。この目標に向かって、男性の形式と女性の形式は、人間を、さまざまな道を通して導くのである。女性の形式は、まず第一に、その優美さによって感覚を魅了するのである。しかし、素材は完全に形式であり、見かけの恣意性は完全に必然性であり、感覚的魅力の豊かさはただ繊細で洗練された精神性の表現に他ならないのであるから、まず最初に呼び覚まされた感性的感覚は、神聖な純粋さで<sup>37</sup>、精神的感覚へと流れ込んでいくのである。男性の形式は、感覚に語りかけることによって、直接的に同時に決然として精神に行動を要求するのである。しかし、形式は、その内部においては素材として、必然性は自由として、そして精神的尊厳は、感覚的優美さを身にまわって現れるのであるから、まず最初に生き生きと活発化される精神的感覚は、感性的感覚へと移行していくのである。前者においては、心情 (Gemüht) は、遊戯 (Spiel) から真剣さ (Ernst) へと、後者においては、真剣さから遊戯へと動いていくのであり、そして双方の場合において、二つの異なった感覚が生まれ、そのあいだで心情は絶えず揺れ動き、その感覚を心情はつねに再生産するのであるから、双方の形成のそれぞれは、混じり合った気分を生み出し、そのなかでそれぞれの本来の性格は、相対する性格によって和らげられているのである。この結びつきによって女性の形態は弛緩させる特質を捨て去り、男性の形態は緊張させる特質を捨て去るのである。そして前者は力を吹き込まれることによって、後者は優美さによって和らげられることによって、双方が生き生きと心に働きかけるのである。それに対して、双方の形式のそれぞれに対する好意 (Zuneugung) は、みずからの性格と他方の性格との調和に依存するのであり、より穏やかな感覚 (Empfindung) はむしろ女性の美のもとに、より精力的な感覚は男性の美のもとにとどまることになるであろう。ところで、このようにしてそれぞれの観察は、みずからに類似した一面的な気分から発するのだが、混じり合った気分を生み出すのがつねであることによって、心情 (Gemüht) はつねに一方によって他方のために、そしてそのようにして、双方によって理念的な美<sup>38</sup>のために受け入れられるのである。

それゆえ、最高の作用を求めべき芸術家 (Künstler) は、双方の形態の研究を相互に分離したり、あるいはただ一方の側の表現に身を捧げたりしては、絶対にならないであろう。しかし、そのような一面性をこの上なく慎重に避けたとしても、当の芸術家は実際けっして双方において同様に幸福であることはないであろうし、彼を主として一方の側に引き寄せる傾向を克服することはけっしてできないであろう。なぜなら芸術家の天才 (Kunstgenie) もまた、性の性格を感ずるからなのであり、純粋な理念性 (Idealität) を求める緊張極まりない努力は、性の性格を実際ただ高貴なものにすることはできるのであるが、消し去ることは困難であろうからである。男性的な形成は、釣りの正確さ ((Richtigkeit der Verhältnisse) で、芸術の要求を満たすのであり、女性的な形成は、輪郭の優美さによって、美に対する感情の要求を満たすのである。しかし、感情は、悟性がそれを育成したときのみ確たる導き手なのであり、それゆえ芸術家の卵は、まず最初に男性の形態で練習しなければならないのである。というのも彼はそこで芸術の技術的部分がしっかりと明瞭に描かれているのを見出すからなのである。彼がこの研究において相当の進歩を遂げたときによりやく、彼の目にもまた、形式の同じ必然性を、女性の優美さの覆いの下にもまた発見することに成功するであろうし、彼の [芸術家としての] 訓練 (Ausbildung) の最後の困難な歩みは、この必然性を、魅力を傷つけることなしに描くことにな

るであろう。感性の最高の段階においては、女性の美の表現は、より困難なものである。なぜなら、男性の美が芸術家に対して行うありとあらゆる要求に、さらにもっとも困難な要求が付け加わるからである。つまり、それは芸術家が、女性の美の外観を避けるというもっとも厳しい合法則性を証明することによってなのである。それに対して、よりわずかな完全性（Vollkommenheit）のみが要求されるのであれば、女性の形態は、ふたたびより簡単なものになる。なぜなら、男性の形態においては、真実に対するあらゆる欠点は、あまりにも明白なものであり、いっそう深い研究がすでにそれらすべてを避けることを要求するのであるが、それに対して、女性の形態においては、凡庸な芸術家ならびに平凡な批評家は、たんなる女性的なものの外面に、つまり、柔らかさ、好ましさおよび魅力に満足してしまい、その彼方にある、真実の虚偽とまでは言えなくとも、実際すくなくとも空虚さを、はるかに容易に見逃してしまうからである。

しかし、主として女性の美を描くべく定められている真の芸術家においてさえ、まず最初に想像力は、柔和な安定性と愛すべき優美さに対する要求を貫くのであり、彼自身、（このような表現が許されるのであれば、）芸術の感性的部分から出発するのであるが、ただ彼はそこにとどまるのではなく、そこから理念（Idee）へと移行していくのである。ところで、この女性の美を彼は、その最高の純粋さと厳密さで捉え、表現しようとする。しかし、かの想像力の優位のゆえに、彼は、視線の鋭さよりもむしろ柔和さを、手腕の大胆さよりもむしろ繊細さを有しているのであり、個々の特徴を正確に区別するように思われるよりも、むしろ全体をほとんど気づかれることのないそれらの移行性によって結びつけるのである。まったく逆に、男性の美を描くべく定められている芸術家においては、まず最初に、形式の決然性と必然性に対する精神の要求が生まれる。彼は、芸術の精神的部分から出発するのであり、鋭い眼力でその形態の特徴を捉え、それを力強い特徴をもって描き、同時にそれを優美な気品さに包み込み、そうすることによって真実から美へとみずからを高めていくのである。たしかに、いかにここで構想されているのかを描写するに際して、現実と緊密に結びついているものをあまり切り離さないようにすることは、避けられないことである。しかし、実際否定しようもなく、これら双方の違った芸術家の資質における、そのような相反する特質の優位性は支配的になるのであり、理念的な美の研究<sup>39</sup>を通してたしかに和らげられはするであろうが、けっして完全に消し去られることはないであろう。

それゆえ、たとえどのような関係において、異なった性の陶冶が観察されるのであろうとも、それはつねに二重の関係性のなかで見出されることになる。つまり、自分自身に対する関係性と理念に対する関係性においてである。そして、双方の性がその内的な、相互に支え合う資質によって、人間の力を、有限な範囲を超えて、拡大するのとまったく同様に、それは、外的な異なった形態によって、美的感情（Schönheitsgefühl）を理念に向かって導いていくのである。なぜなら、たとえ外的形成が内的な有機的規定から理解されることがどれほど困難であろうとも、それにもかかわらず、自然の隠された関係性そのものを探し出すことは、報われるべきことだからである。そしてここでは、双方の性のどちらも、その内的独自性に従えば、みずからが実際に現わしているのとは違った別の形態のもとで現れることは不可能であったということを納得するためには、なんら骨の折れる努力を必要とはしないからである。男性においては、力の優位が特徴的であり、しかも、生み出すべく定められ、素早く集中することができ、つねに一点から外をめざす力である。それゆえわれわれは、その力がすばやく筋肉を緊張させ、妨害してくるありとあらゆるものを力強く片づけ、絶えざる活動にみなぎりつつ、安らかな享受を遠ざけるのを見るのである。そうすることによって、その力は造形芸術に近づくのであり、造形芸術は、まさ

にその力と同様に、生ける原理に死せるものを支配する権利を与えるのである。

363 それに対して、受容する力 (empfangende Kraft) は、さらに大いなる豊かさを有している。それは、根源的に生み出すというよりも、むしろ活動に應えるべくつくられているのであるが、情熱に欠けているところのものを持続性 (Beharrlichkeit) によって補うのである。それゆえ、輪郭の連続した安定性、繊細さと柔和さによって、女性的なものは、外的な形態においてもまた現れ出ているのであり、そのことによって外的な形態に、たとえ美が欠けているのであろうとも、しかし少なくともつねに快い魅力を与えるので、その快さは非常にしばしば本来美的なものと同様と混同されるのである。ところで同時に、女性的なものは、いかなる部分にも主に前面に出ることを許さず、そしてただ最高の感性的まとまり (sinnliche Einheit) がそれに完全に相応するのであるから、女性の形態はそもそも男性の形態よりもより美に近いところに位置しているのであり、たとえその内容を欠いているところにおいてさえ、少なくとも美の形式を有するのである。なぜなら、あらゆる強制からの自由はすべての美の魂であり、真の美はただ、それがこの特性をもって最高の現実性 (Realität) と決然性 (Bestimmtheit) とを結びつけることによってのみ区別されるのであるから、すでに形式のたんなる安定性、流動性および大胆さは、かの本質的な美の性格を身につけているので、美の類似物と思われるに違いないからなのである。ここに議論の余地もなく、主として男性から女性に向けられる美の要求が基づいている。男性においては、美は付け足しであり、男性のなかの一面的な性の性格に打ち勝つ人間の自由な贈り物である。女性においては、美は、その性が果たす責任として、女性的なものそれ自身のように要求されるのである。それゆえ、女性的なものと同様、美はまた内面的なものの判断においても考慮されうるのであり、ある程度義務化されうるのである。なぜなら、女性性 (Wiblichkeit) の内的性格は、美以外のいかなる表現をももちえないからである。しかし、不当にも、ただみずからの制限された類でしかありえないこのまだ内容のない美は、かの真正の理念的な美と混同されることになるであろう。その真正の理念的な美に向かって、むしろそれぞれの性は、ただ純粋な人間性をより多くみずからの内に主張しようとすることによってのみ、つまり、男性的なもの (das männliche) はより多く自由 (Freiheit) を、女性的なもの (das weibliche) はより多く必然性 (Nothwendigkeit) を獲得しようとする試みしようとするによってのみ、みずからを高めていくことになるのである。

364 しかし、この二重の努力によって、本来の美はかならずしも高められるわけではない。非常にしばしば、形態はそのことによってただ生き生きとした表現 (Ausdruck) を得るだけであり、その表現は本質的に微によってさまざまなのである。たしかに、経験においては、双方はしばしば相互に混同され、われわれは、たんに面白いということではかないであろう形態が美しいと名づけられるのを耳にすることも稀ではない。いつもは非常にしばしば感性 (Sinnlichkeit) によってなのであるが、ここでは美的感情は悟性によって惑わされ、唯一美に対して感受性のある調和的心的気分というものがかいかに稀であるかが、あらためて明らかになるのである。表現が支配的なところでは、心情が諸特徴を制禦し、それらがみずからの自由に従うことを妨げるのである。それゆえ、そのような形成は、たんなる美的形成同様に、自己自身によってみずからを現わすことはなく、注意は、外的形態から内的性格へと引きつけられていくのである。それに対して、端的に好ましい形成<sup>40</sup>は諸特徴の最高の自由を告知するのである。つまり、それらの諸特徴は、いかなる一定の表現とも結びつくことはなく、ただ優美な安定性のみみずからを委ねるのである。それゆえ、たしかにここでは、まなごしは形態を離れてなにか別のところに導かれることはないのだが、しかしこの空虚さのもとにとどまるということは、同様にまなごしには不

可能なのである。その双方の中間に位置するただ美しい形態だけが、内的に完成していて、感性をも精神をも満足させるすべてを同時に含んでいるのであり、ただその内部においてのみ、この上なく内容に富んだ表現が同時に、諸特徴のこの上なく自由な優美さと結びついているのである。しかし、それゆえいまや観察者はまた、そこにおいて、みずからの大胆極まりない期待が凌駕されているのを見出すのであり、彼はその全存在を完全極まりないまとまりとして見るので、彼の想像力はもはや、外的形態を内的意味から分離することはない。つまり、美の形態には性格が欠けているという理由によってではなく、美の形態が、自由を犠牲にすることなしに、性格を際立たせているという理由によって、美は表現と区別されえないのである。表現がただ現在の状態の描写に、つまり狭い現実限定されることによって、美はむしろ性格の全体（Total）を、そしてそこからありとあらゆる個々の表現が流れ出てくる性格の無限の能力を表現するのである。しかし無限なるものは現実においては到達しえないのであるから、当然のことながら、最高の人間の美は、ある悟性においてただ表現であり続けるだけであり、だからただ表現を美に近づけることだけが重要なのである。一時的な激情のイメージから、表現は永遠の性格のイメージへと高められなければならない、しかもただたんに一面的なものによってだけではなく、ありとあらゆる面から調和的に形成されている性格のイメージへとなるのである。

365 奇異な現象ではあるのだが、美の表現は危険をはらんでいるにもかかわらず、われわれの時代のよりよき趣味はもっぱらほとんどそこに向けられているのである。絵画においても造形芸術の作品においても、われわれは、諸性格の描写に関して優雅さと美とを忘れていたのであり、そこにあるのはしばしばただ諸性格の瞬間的な情熱的気分だけなのである。もしも詩人がわれわれをただ性格表現によって満足させようとするならば、われわれは、そこに美が基づいている全体の構成の欠陥を見逃してしまうのであり、まったく同様に、もしも作家がわれわれをただ大胆で独創的な言い回しによって引きつけるのであるならば、われわれはそもそも描写の芸術的統一の欠如を許してしまうことになるのである。流行の恣意的要求を超越している真の作曲家は、同様の不平を述べるのであり、美の法則をまた日常生活の対象へと適用することに慣れてきた者は、われわれの交際においても、われわれの礼節においても、われわれの習俗においても、たとえ悟性が内容と性格によって個々にどれほど満たされるのであろうとも、非常にしばしば、必要な優美さと真の美に対する努力を見失っているのに違いない。ここで、完全に相対立する性格の二つ国民（Nationen）が次第しだいにわれわれの趣味（Gechmack）に及ぼしてきた影響というものを想起せず、そしてその視線を期待に満ちて、内容をも、形式をも再びみずからの権限のなかに取り込み、双方に対し相互に排除し合うことを妨げてきた第三の国民に、向けさせないようにするということは、ほとんど不可能なことである。特別の国民的性格に普遍的な理性の性格の作品だけにありうる完成というものが期待されうるならば、なのであるが。しかし、この道以外で真の美に突き進むということがどれほど困難であろうとも、まさにこの途上において、真の美を完全に見失うという危険はふたたび存在するのである。

美それ自体以上に、女性性は、この危険に晒されているのに違いない。というのも、女性性は、ただたんに美に近いというだけではなく、また表現によって失われていく側から美に近づいていくからなのである。そして実際、もしもかの支配的な時代の趣味に<sup>41</sup>、女性の陶冶に対する影響力がありうるものとするならば、真の女性性に対する表現においては、配慮がなされなければならないであろう。なぜなら、ここでもまた、魅力的なものが、美的なものと同化されることが稀ではないからであり、さまざまな表現方法そのもののなかで、はるかに強く際立った表現よりも、むしろ柔和で望ましい表現のほうが

あとに位置づけられるからである。純粹な感情の判断よりも、はるかに頻繁に感覚あるいは悟性の一面的な要求に支配されるということが、そもそも女性たちの宿命であるように、彼女たちの美の判断にさ  
 366 いしてもまた、(もしも実際感覚的なものを超越するのであるならば) 精神、機知、活発さというなん  
 らかの際立った表現に対して、さらにきわめて大いなる考慮がなされるのに対して、穏やかではるが、  
 柔和で繊細な感情の表現は、あまりにも容易に見過ごされるのである。いまでもなお、ただ魅力的な  
 のを求め、まさにあたかもみずからの無気力さを意識するかのように、至るところに目を見張るばかり  
 の魅力を要求することを、人は完全にはやめることはない。それゆえ、その一貫した美の調和が最も多  
 く受け入れられる、まさに最高の性格の表現は、またいまでもなお、もっとも多く誤解されるのであ  
 り、より目につく悟性の輝きが、ただ強調されることによってのみ興味深いものとなりうる、控えめな  
 感覚の表現よりも、優先されるのである。なんら卓越したものを有することはないのだが、しかしそこ  
 から感情の繊細さ、穏やかなつつましさ、あらゆる真なるものと善なるものに対する控えめな熱意が語り  
 かけてくる、まさに真に女性的な形態は、両義的な賞賛によってはねつけられることになるのである  
 が、それは、報われるというよりもむしろ恥じ入らせられるのがつねである。しかし外的陶冶における  
 真の女性性の性格にとって、趣味の雰囲気以上に破滅的なものはないのであるが、それは、時代のより  
 よき方向性に従えば、終わりに近づいていまもなく、もはや支配的なものではなくなるであろうとはい  
 367 いえ、それにもかかわらずいまだになおあまりにも一般的なものである。なぜなら、女性の形態の独自性  
 は自由と全体の調和に基づいているのだが、しかし表現はつねに個々の特徴を多かれ少なかれ際立たせ  
 るものなのであるから、表現は全体と必然的に対立せざるをえず、非常にしばしばある種の形成の非女  
 性性は、表現のたんなる強調に基づいているものと見なされることになるであろうからである。

しかしながら、女性の形態の完全さを、美とは関わりのないものとしてさえ確信している者は、それ  
 ゆえ、男性の形態に対してよりも女性の形態に対して、少なからざる表現を認めようとするのであろ  
 う。女性の形態はむしろ、その本性によって悟性よりも感覚に頼るのであるから、さらに慎重に空虚  
 さを避けなければならないのである。たしかに、その内部において表現がなされうる境界は、女性の形  
 態においては、実際はるかに狭いのであるが、ただ、女性の肉体は、大いなる柔軟性と微妙な多様性  
 によって特徴づけられうるのであり、そのことによって、とりわけ表現の繊細さを有するのである。なぜ  
 なら、くっきりと際立った個々の特徴においてではなく、緊密に形態全体のなかに織り込まれ、一見し  
 たところではほとんど気づかれず、高貴な単純さを身にまとい、内的性格は、真に女性的な造形のな  
 かに現われるに違いないからである。しかしこの完全な調和が達成されないのであれば、魂が前へ前へと  
 突き進もうとするよりも、ただみずからを垣間見せることに甘んずることが、より女性的でさえあるの  
 367 である。つまり、明らかに、女性の美は表現と、しかしただ最高の表現とのみ調和しうるのである。一  
 時的な傾向や激情の制限された状態ではなく、ただ性格だけが、幸運にも女性の美において現れるので  
 あり、それはまた、ただその力の調和的な統一のなかに、そしてその資質の全体性のなかにのみ、現れ  
 るのである。それゆえ、女性性は、悟性の表現よりも容易に、想像力と感情の表現を許すのであるが、  
 それは、悟性がむしろ分離に向けられているのと同様、想像力と感情は結合に向けられているからなの  
 である。とはいえ、悟性の力自身、女性においては、分離的というよりも結合的に作用するのであり、  
 そこから主として、われわれが精神と名づける独自の現象が生ずるのであり、それを男性は必ずし  
 も同じように容易に手に入れるとは限らないのである。それゆえ美と女性性は、形態における表現対  
 して、完全に同じ関係に位置しているのである。同様に表現は両者に危険を及ぼし、同様に両者と結合

しうるのである。

それに対して、男性の造形の独自性の表現は、事情がまったく違うのである。それは、個々の顕著な諸特徴に基づく場合もあれば、あるいは他の全体の形態にさらに繊細に組み込まれているとされる場合もあり、全面に押し出されることもあれば、控えめに背後にとどまることもありうるのである。だからそれは、たしかに強さによって両性を互いに接近させる美を損なうこともありうるが、しかしそのさい、男性性の特徴的なものは、失われるよりもむしろ獲得されることになるであろう。それゆえそれは、女性においては、純粹な人間的形態から期待されるよりも秘められているとするならば、男性においては、より明瞭に際立ったものとなっているのである。それゆえそれはまた、男性の造形においては、より明瞭に目につくものに対して、女性の造形においては、未熟な目にはしばしば見逃されさえするのである。しかし男性の形態における調和は、感ぜられるというよりもむしろ考え出させるものなのであるから、男性の表現は、女性の表現よりもしばしば謎めいていて、奇異なものに思われるのである。女性の表現は、形態全体と結びついていて、この結びつきによって説明されるのである。しかし、まさにそれゆえに、女性の表現は、完全に理解されるためには、本来繊細で多面的に訓練された感覚を、男性の表現は、強烈な鋭い洞察力と経験によって裏打ちされた判断力とを必要とするのである。

もっとも自由な領域は、形態の動きの表現にあり、ここでとりわけ女性の性格は、顔の一定の特徴よりもはるかに明白に変転する表情の動きのなかに現れるあらゆる独自性を示すのである。まさに女性の形態は、男性の形態よりも表現力に富んでいるのである。そして情感に満ちた音楽の和音のように、ありとあらゆる女性の動きは、より繊細かつ柔和な雰囲気満ちているのに対して、男性はここでもまた、おおいなる激しさと厳しさを示しているのである。女性の魂のなかでは、想像力はつねに悟性に、感覚は理性に先んずるのであり、そうであることによって、その双方は、みずからもまた絶えず相互に移行しあうことによって、共同で心情の統一を生み出すのであるが、それを男性はただ懸命な努力によって目ざすのである。だから、女性においては、内的な生もまた、外的な現象形態<sup>42</sup>と切り離されることが少なく、魂はみずから容易に、造形的な構造のなかに現れるのである。おのずと無制限な自由な輪郭が特徴となるのであり、それによってたんなる表現が美となっていくのである。なぜなら、そこから語りかけてくるのは個々の動きではなく、魂全体なのであり、しかも、そのなかでは想像力と感覚が支配的であるがゆえに、不安定なものや定かならざるものよりも、厳しいものや堅固なものを避ける女性の魂だからなのである。しかし、ただたんに形態だけではなく、さらに力強く感覚を呼び覚ます声もまた、両性における同様の独自性をみずから担っているのである。より柔和に、より好ましい音調で、しかし多様に変化する絶妙な響きで、声は女性の口から鳴り響くのである。単純ではあるが、しかし激しく強烈に、声は男性の口から鳴り響き、双方が魂の感情をその性格に従って表現するのである。

女性の形態が内的なものを映し出す忠実で明るい鏡となるのはその繊細な柔和さによるのであるが、それこそは、異性との交際がもたらす独特な喜びなのである。それほどまでに直接的にわれわれに語りかけてくるものは他にはなく、それゆえまた、それほどまでに深い感情を呼び覚ますものはなく、それほどまでに和やかな気分を引き起こすものはないのである。行動によって容易に我を忘れてしまう男性を、ふたたび我に返らせ、悟性が分けてしまうものを感情によって結びつけ、男性のゆるやかな歩みを先へ先へと進ませ、そして、男性が目ざす最高の理性の統一を具体的に表現することが、この性のすばらしい使命なのであり、この性の外的形成はまたきわめて忠実にこの使命を果たすのである。それゆえ、女性の力はまた、主として生き生きとした現在に基づくのであり、しかも感覚に対してではなく、

369 想像力に対してなのである。たしかに、まさにこのことはまた男性にも当てはまるのであるが、それは、彼がみずからの形態全体の高貴さをもって現れるときなのである。彼の形態もまた、心を力強く捉え、彼の魂の気分をきわめて繊細な特徴で描く独自の言語である。しかし、内的なものをこの優雅さにまでもたらし、そのような柔軟性を有する外的な構成を可能にするためには、かれはみずからの性からいわば離脱し、自然の目的を超越しなければならないのである。つまり、高度な使命そのものが要求する以上のことを果たさなければならないのである。それに対して、女性は、その形態の生き生きとした表現そのものを失うことのないように、ありとあらゆる女性の独自性を、慎重に慎重に維持すべく努めなければならないのである。そして、この努力が完全に失敗に帰することになるのであれば、女性は、ただたんに自然の使命と外的な日々の生の営みを果たすことだけしかなくなってしまうように成り下がるか、あるいは本来なすべきではない領域の仕事をするようになってしまうか、なのである。なぜなら、ここでもまた女性性は、たんなる自然の目的という境界を超えるや否や、ただ最高のものだけを与えられるべく定められているからである。そして、女性性に対して他の要求をする者は、ただその性についての無知を晒すことになるのである。

(すぎた・たかお／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授  
かんの・けん／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科准教授)

## 注

- 1 「完全な人間の理想」(das Ideal der menschlichen Vollkommenheit) と、「人間の美の理想」(das Ideal der menschlichen Schönheit) が対置されている。
- 2 原語はdas genauere Gleichgewichtである。
- 3 原語はder reine Geschlechtscharakterである。
- 4 原語はein vollständiges sinnliches Bildである。
- 5 原語はder wahre Geist der Geschlechtseigenthümlichkeitである。
- 6 原語はdie productive Einbildungskraftである。
- 7 ゼウスを指している。
- 8 ディオーネ (Dione) は、古い上格の女神で、ゼウスとのあいだにアプロディテー (Aphrodite) を生んだ。以下ギリシア神話の女神については、呉茂一『ギリシア神話』上・下 (新潮文庫, 1979年) を参照。
- 9 ウェヌス (Venus) は古代ローマの美と愛の女神で、古代ギリシア神話では女神アプロディテ (Aphrodite) に当たる。
- 10 原語はIdealgestaltである。
- 11 原語はIn der seelenvollsten Mineとあり、フンボルトはフランス語のla mineをドイツ語的に用いている。ちなみに現代のドイツ語つづりはdie Mieneである。
- 12 原語はBauである。
- 13 ディアナ (Diane) はギリシア神話のアルテミス (Artemis) に当たる。ゼウスとティタン神族のレトの娘で、アポロの双生の妹。独身を通す許しを父神から得、アルテミスにならって純潔を守ることを誓わせられたニンフたちとともに、もっぱら山野に狩りをして過ごした。
- 14 原語はBeschäftigungenである。
- 15 ミネルヴァ (Minerva) は、古代ローマの技術工芸の女神で、古代ギリシアのアテナ神と同一視された。
- 16 Jupiter 古代ローマの最高神で、ギリシア神話のゼウスと同一視された。
- 17 Latone ローマ神ラトナ (Latona) で、ギリシア神話のアルテミスの母神レートー (Leto) のこと。ラトナの娘とはアルテミスのこと。
- 18 Endymionはギリシア神話で、小アジアのカリアの羊飼いの美少年。月の女神セレナ (Selene) は、ラトモス山中で眠って

いる少年を見て、恋心を覚え、その美しさを飽かず眺めていられるようにと、彼を永遠の眠りを与え、日が暮れると彼の側降り立って夜を過ごしたという

- 19 Pallas アテナ神の別名。
- 20 シセリア (Cytheren) は、アプロディテ Aphrodite [=Venus] の異名。
- 21 Junoはローマの最高の女神でユピテルの妃。ギリシア神話のゼウスの妃ヘラと同一視された。
- 22 原文はDer Ausdruck der göttlichen und weiblichen Naturである。
- 23 原文はdas Ideal einer geistigen Naturである。
- 24 原文はdas weiblicheである。
- 25 原文はaus der sinnlichen Harmonie des Bauesである。
- 26 原文はein Ausdruck der sittlichen Harmonie des Charakteresである。
- 27 Bacchus 古代ローマ神話で酒神、ギリシア神話のディオニソス (Dionysos) に当たる。
- 28 原文はGeschlechtseigenthümlichkeitである。
- 29 原注 「たとえただ最初の根本的諸特徴においてであろうとも、ここで人間に関して生じたのと同じようにして、あらゆる動物の種類骨相学 (Phzisionomik) が構想されうであろう。そこではただ主として二つの障害が避けられるべきで、戯れの想像力 (Einbildungskraft) の恣意に対しても、生き物の内的特質を熟知している悟性に対しても、一面的な優位を認めるべきではないであろう。それゆえ、1. たんなる気まぐれに従うのではなく、至るところ、発生学 (Naturgeschichte) に導かれて、形態に影響を及ぼすかぎりにおいて、本来の体格 (Körperbau) から発すること。2. すでに上で想起されているように、生物の内的な完全性の概念に従い、その形態の骨相学的判断にいかなる影響も許さず、それに少なくとも最初は惑わされないこと。たとえば完全に動物たちがその形態に関して、より低い位置を与えられていたり、あるいはその逆であったりしてもである。動物界に関しては、後に、植物界への移行を多くの点で容易に見出すことができるであろう。」
- 30 原文はin dem ganzen Habitus des Körperbauesである。
- 31 ここまでが『ホーレン』第3号 (Horen, 3, S80-103) に掲載され、これ以降は第4号 (Horen, 4, S. 14-40) に掲載された。全集では、I. S. 351の中央に一行スペースを入れて、それ示している。
- 32 原語はspecificirt ist である。
- 33 「この段落及び以下に続く諸段落において、読者は『ホーレン』の第1号および第2号の『義的教育に関する書簡』において提示されている美の概念を想起されたい。」という原注があり、それに関連して全集第1巻352頁脚注に「特にシラー『全集』第10巻、324頁 (Schiller, Sämtliche Schriften 10,323) を参照」とある。
- 34 原語はdurch ihre innige Gemeinschaftである。
- 35 原語ではin der weiblich-menschlichen Gestaltである。
- 36 原語ではunter gebildeten Nationenである。
- 37 原語ではin unentweihter Reinheitである。
- 38 原語では die Ideal-Schönheitである。
- 39 原語ではdas Studium des Ideal-Schöneである。
- 40 原語はdie bloss gefällige Bildungである。
- 41 原語はjenem herrschenden Zeitgeschmackである。
- 42 原語はErscheinungsweiseである。